

ファシズムと文学的営為

日夏 隆

1933年1月から1945年8月までの日本では、ドイツ文学の分野にかんするかぎり、困難な状況からの逃避の手段に文学がなりえたということすら、ほとんどなかった。この期間に、ナチ党员作家と消極的協力者とを合わせて、ともかくナチス・ドイツの顔をもった作家の作品が、合計80冊以上、邦訳されている。計画されながら出版に至らなかったものを加えれば、その数は100に迫る。だが、戦後に、そのことの責任が問題にされたことは、ほとんど絶無といってよい。それどころか、鼓常良、佐藤晃一、星野慎一、高橋義孝、高橋健二、国松孝二といったような、かつてナチス文学の翻訳紹介者として絶大な貢献をなした文学者たちは、戦後になって沈黙するどころか、今度はナチスから弾圧され忌避された作家たちを、そもそもナチス時代もその時代の自分自身も存在しなかったかのように、つぎつぎと翻訳紹介し、戦後世代の意識のなかから20世紀ドイツ文学（および日本での文学的営為）の全体像を消し去るのに貢献した。

「とにかく、わたくしは〔……〕トオマス・マンの文学に共感を覚えて次第に彼の世界へはいりこみ、何を考えるにも彼と共に考えてきたとさえ言えるこの二十年の歳月をかえりみるとき、そぞろに感慨の湧くのを禁じ得ない。」（河出書房版「世界文学全集」月報第20号、1954年12月）（傍点は日夏）——第二次大戦後にこう記した佐藤晃一は、かつて1942年にヒトラーの『吾が闘争』が真鍋良一訳で興風館から邦訳刊行されたとき、「技術院総裁子爵井上匡四郎氏、日独文化協会男爵三井高陽氏、東大独逸文学教授木村謹治氏、同助教授相良守峯氏」等とともに同書への「絶讃」を表明した「東京高校教授佐藤晃一氏」と、同一人物である。そして、この同じ佐藤晃一が、1954年には、山下肇と共著で『ドイツ抵抗文学』（東大新書）を公にすることになるのだが、ファシズム・ドイツにたいする亡命文学者たちの果敢な抵抗を描いたこの本には、ヒトラー・ファシズムにたいして自分自身および日本の知識人たちがかつてとった態度についての反省や自己批判は、その片鱗や痕跡さえも見られない。マン一族の英雄的な「抵抗」の歴史が、もっぱらそれと同じ位置に身をおく著者の感情移入の対象としてのみ、叙述されているのである。

それゆえ、日本浪漫派ファシスト＝神保光太郎編の『ナチス詩集』（ぐろりあ・そさえて、1941）のなかで、数あるナチス詩人のうちでもディートリヒ・エカート、カール・ブレーガー、ハンス・ヨースト、ゲルハルト・シューマン、バルドゥーア・フォン・シーラッハ等、ナチス詩人中のナチス詩人ともいふべき面々をことさらに担当して訳した高橋義孝を、そのことだけのゆえに非難するつもりはない。当時27歳だったかれは、同書巻末の解説「ナチス文学概観」で、「トーマス・

マン的、又、ユダヤ的、主知主義文学」をナチス文学の「対蹠物」として位置づけ、ナチス文学を「形而上的実存としての民族の文学、戦争体験の文学、及び郷土文学」の三つに分類して、例えばその第二の類型について、こう書いていた、「ドイツ戦争文学は豊富な色彩を持つところの偉大な過渡期・西欧の仮象的文明の殻を破って躍出する根元的血族的現実力の真の表現である。有機的なドイツ国家形式を求むる憧憬の産物であり、ドイツの国民的覚醒の出発の芸術的表現である。それは血と運命に生れた独自の文学である。」

ナチス文学にたいする高橋義孝の姿勢は、「専ら厳密な客観的な紹介を標榜しながら、その実、この本でとりあげられた150人におよぶナチス作家たちが、すべて何らの批判もなく肯定的に論じられるのである。——だが、もっと大きな問題は、むしろ、その後の高橋義孝にあるだろう。かれは、第二次大戦後になると、今度は、かつてかれ自身がナチス文学の「対蹠物」と名づけたトーマス・マンの位置に立って、ナチズムを歴史的に批判し（たとえば『現代ドイツ文学』、要書房、1955）、あるいはルカーチの『トーマス・マン論』を撃つことによってマルクス主義文学理論の総体を論駁する（とりわけ『文学研究の諸問題』、新潮社、1958）。

過去を現在から照射しなおし、過去との対決を通して現在を見さだめることは、たとえば「ファシズムと文学的営為」というテーマを考える場合でも、広義の文学史的テーマにたずさわる場合でも、その考察の対象にだけ適用される単なる手順ではなく、考察作業の主体自身にも適用すべき原理ではあるまいか。しごく当然のこの原理が、訳者や著者からも、出版担当者からも欠落することによって、発せられた言葉は救いがたく現状追認的なものに墮し、時局の移り行くままに、なしてしまった過去の行為にすぎぬもの、発してしまった過去の言葉でしかないものとして、打ち捨てられ、不可触視され、化石となり、そのうえにさらに新たな現状追認の言動が重ねられていく。

かつて自分がなしてしまったこと、発してしまった言葉、これにたいする真摯な反省と総括の試みをおこない、日常の活動のなかでその償いをする必要があるであろう。

今必要なこうした総括の作業は、現在を基準にしてみずからの過去を予定調和的に清算することでもなく、安全圏に身を置きながら先人たちの非をあげつらうことでもない。ヒトラー・ファシズムと文学とのかかわりを究明しようと試みるなかでも、問題はつねに、みずからがかつてその支配をゆるし、いままたそれをゆるそうとしているのかもしれないわれわれのファシズムなのだ。

《ナチズム》、すなわち《ナツィオナルゾツィアリズムス Nationalsozialismus》を日本語でどう訳すかについては、必ずしも説が一定していない。《国家社会主義》と《民族社会主義》と《国民社会主義》の三つが、それぞれ事柄そのものの性格把握のニュアンスの違いを反映しながら、並存している。

ところが、ナチス文学を示すものとして《国民文学》という訳語が選ばれたことは、まことに適切な処置だった。これによって、抑圧支配のための強権としてのナチス体制は、《国民》の総意

によって形成され支持されている構成体、いわば民主的な生活環境という相貌をおびることができた。そして、文学と政治を対極としてとらえることによって文学とかかわる自己自身を確証しようと考える文学者や文学愛好者も、ナチス文学の政治性を否定することこそできないにせよ、これは国民の合意によって成立している政治性であり、したがって普通の意味での政治性のように文学と対立するものではないとして、みずからを納得させることができた。それどころか、この《国民文学》という言葉は、もっとも非政治的・反政治的な文学者・文学愛好者を、もっとも極端な政治主義者に変えることができたのである。

この《国民》を、ヒトラー一派によってたぶらかされていたもの、と規定することもまたできない。かれらにとって、ナチス・ドイツは虚像ではなく実像だった。《第三帝国》の《国民》にとっては、その帝国こそが現実だったのだ。ヒトラーのドイツにたいして《真のドイツ》の担い手をもって任じていた亡命作家たちは、この現実を撃つことができなかった。《30年代》の代名詞のように考えられがちな《フランクフルト学派》にしても、ナチス・ドイツの《国民》にとっては、無であった。それは現実の中に存在しなかったのである。ナチス・ドイツが徐々に形成されていく《ヴァイマル共和国》時代に、すでに活動していたフランクフルト学派は、ファシズムを抑止する現実の力とはなりえなかった。のちになって再評価された思想家や思潮を、その時代の隠れた真のモメントとみなすとらえかたは、《内面性》を現実からの《逃避》としかとらえず、夢や幻想を現実の《捨象》としかみなしえない考え方と同じく、その時代の現実の姿を、《国民》がそのなかに生きる現実の姿を、ついに見ることがないだろう。ナチス・ドイツの《国民》にとっては、ヒトラー・ファシズムの現実こそが、唯一の、自己の現実なのである。

だがしかし——だからこそ、《国民》の視点からは、けっしてファシズムを撃つことはできないのだ。《国民》の現実を現実的な現実として認め、しかも操作の客体におとしめられないような契機をこの現実のなかに形成すること。これこそが、前ファシズム状況における文学の課題でもあった。既成の秩序への叛逆から出発したかれらの表現活動は、《国民》の枠からはみだしていくものを予感的にはあれ描いた時期を、少なくとも一瞬、ふくんでいたのである。この一瞬と、そのあとにくる永い道程とのあいだにあるのは、必ずしも断絶と深淵ばかりではない。ほとんど消え入りそうな痕跡として、あるいは未明の予感として、そこにたしかに存在しているにちがいない脈絡を、われわれはわれわれなりに、発見し構成しなければならないのだ。

—— 田中博教授追悼 ——

田中博教授が亡くなられた。訃報に接したのは昨年4月開講まぎわの時であった。退官されてはほぼ一年後のことである。田中教授のドイツ文学に於ける関心事はトーマス・マンとヘルマン・ヘッセにわたり、フィールドワークを含めた歴史的な研究態度を堅持されていた。田中教授とそれ程深くない親交を結んだ私はベルリン・フンボルト大学に席をおく関係上、田中教授同様、ドイツには何度も足を運んだが、そんな中で私が確立したのは、作品を文学からの証言として定立し、歴史総体を論じるというものだった。いまの文学者に必要なのは正義である。このところを本論では展開しているが、かつて千人の日本人の友人を持つより一人のドイツ人の友人を持つと熱弁をふ

るわれた和田洋一名誉教授の姿を思い出し、田中教授も又、ゆくりもなく結ばれたドイツの人々との親交を大切にされていた由である。田中教授と比すれば、今だ修業途上のまだ私の私は、これからも広がるドイツ文学とのつき合いにむけ、ひとつの追悼として本稿を田中教授に呈したいと思う。